

GILBERTO GIL

& BANDA UM

MEMBER

GILBERTO GIL / *Vocal, Guitarra*

BANDA UM

SERGINHO TROMBONE / *Trombone*

PAULINHO TRUMPETE / *Trumpete*

RAUL MASCARENHAS / *Sax e Flauta*

RICARDO CRISTALDI / *Teclados*

PERINHO SANTANA / *Guitarra*

RUBÃO / *Baixo*

JORGINHO GOMES / *Bateria*

REPOLHO / *Percussão*



「全世界に放たれる透徹した感性 ——ジル・人間を歌う」

(ジャーナリスト) 武藤 辰彦



初めて訪れたブラジルは、日本とは逆に冬のまっただ中だった。とは言っても、日中の気温は、27〜8度まで上がる。リオデジャネイロの有名な海岸、コパカバーナやイパネマは、カラフルな水着と半裸でサッカーボールを追う子供たちで占拠されていた。

猛暑の東京を30時間がかりで脱出し、地球の裏側へ着いたはずなのに、何だかちよつと遠出して盛りの湘南海岸へ放り出されたような妙な気分。だが、全く身体にべつかないさわやかな風は、まさしく非日本のものだ。

ジルベルト・ジルの事務所は、そんな華やかなさんざめきに包まれたイパネマのメインストリートにあった。高級ブティックばかりが並ぶビルの4階。アフロ・ブラジルの雄とファッション群の取り合わせは、なかなかの妙と言えよう。

インタビューは、実は1日待たされた。マネージャー氏によると、7月26日まで続いたヨーロッパ公演から歯が痛み出し、帰国後も口の中の腫れが引かないため、猶予してほしいとのこと。だが、私の頭の中を日本で耳にした“ブラジル・ポピュラー音楽(MPB)界のスーパースター”というジルのコピーがさまよい歩き、これは相当難しい取材になるかも知れない、という思いにとらわれたことも事実だった。

翌日。ガラス越しの明かるい陽光と共に、かすかな不安は霧散した。強固な意思を秘めた濃い眉の下で、ジルの瞳が柔らかく溶けていた。差し出された右手の温かさが、本物の男だけが持つ豊かな包容力を示していた。

◇

シンガー・ソングライターとしてのジルの感性は、今や全世界に向けて放たれ、そして現実を凝視する。その端的な表われが、昨年吹き込んだ秀作「ふたつの月」(ワーナー・バイオニア)だろう。

この作品集に登場するのは、ボサ・ノヴァに加えて、ロック、レゲエ、ファンク。実に多

彩な音楽性と言えよう。そして、「解放への祈り」「僕のことは放っておいて」の2曲には、明らかに南アフリカのアパルトヘイト(人種隔離政策)とパリにおける人種差別への抗議が込められている。

「私の音楽を節操がないと批判する者もいるが、これは一部のエリートのたわ言に過ぎない。私は、歴史的に見て世界のリズムは、すべてアフリカから発したと確信している。アフリカの血を強く意識する私が、外国のリズムだからという理由で、レゲエなどを避ける必要がどこにあるか」

「アパルトヘイトみたいなバカバカしいことは、即刻止めさせるべきだ。人道はもちろんのこと、商工業という実用的な面から考えても、重大なマイナスだ」

明快な主張は、同時に地球的な広がりを求めるブラック・ルーツ=原点回帰の宣言であった。ブラジルにおける黒人奴隷史の一ページ、北東部バイア州の出身であることが、かなりの比重でジルの音楽を定義づけているということなのだろう。

1960年代後半には、トロピカル運動も推進している。ジルを先頭に、カエターノ・ヴェローゾ、マリア・ベターニア、ガル・コスタという現代ブラジルが誇るそうそうたる顔ぶれのバイア州一派が、民族の伝統的なリズムに、ロック、ポップスなど現代的な要素を加味した新しい音楽を提唱した。この時点で、すでにジルの意識の中には国境は存在していなかった、という。「国粋主義者からは、「精神の解放をうたうものであり、あまりに地球主義的」と非難されたからね。おかげで、逮捕(69年)や2年間のロンドン亡命生活を体験させられた」と苦笑した。

「音楽に権力はない。私は必要な限りメッセージを込めて、語ってきたに過ぎない」とも言う。だが、トロピカル運動は、確実にブラジル社会を変えた。ボサ・ノヴァ(新しい波)は大衆レベルに降りてきて、もの見方、





美的センス、生活に大きな影響を与えた。若者の社会的な発言権が増大したことも、一つの成果だった。

そして、44歳の現在、透徹した感性から繰り出される“原点からの訴え”が、多くの人の深い共感を呼ぶ。「私は娘や息子たちとは、友情で結ばれている。下の世代に気を配る必要を痛感しているんだ」という柔軟な姿勢もあって、若い世代の支持も拔群だ。

リオ市内でたまたまのぞいた3人組のロック・グループ、パララマス・ド・スセソのコンサート会場で、16歳の少女に聞いた。「ジル？ブラジルそのものという感じで、私は好き。ロックと同じようにレコードはよく聴くわ」。その言葉が、ジルに対する若者の心情を代表していた。

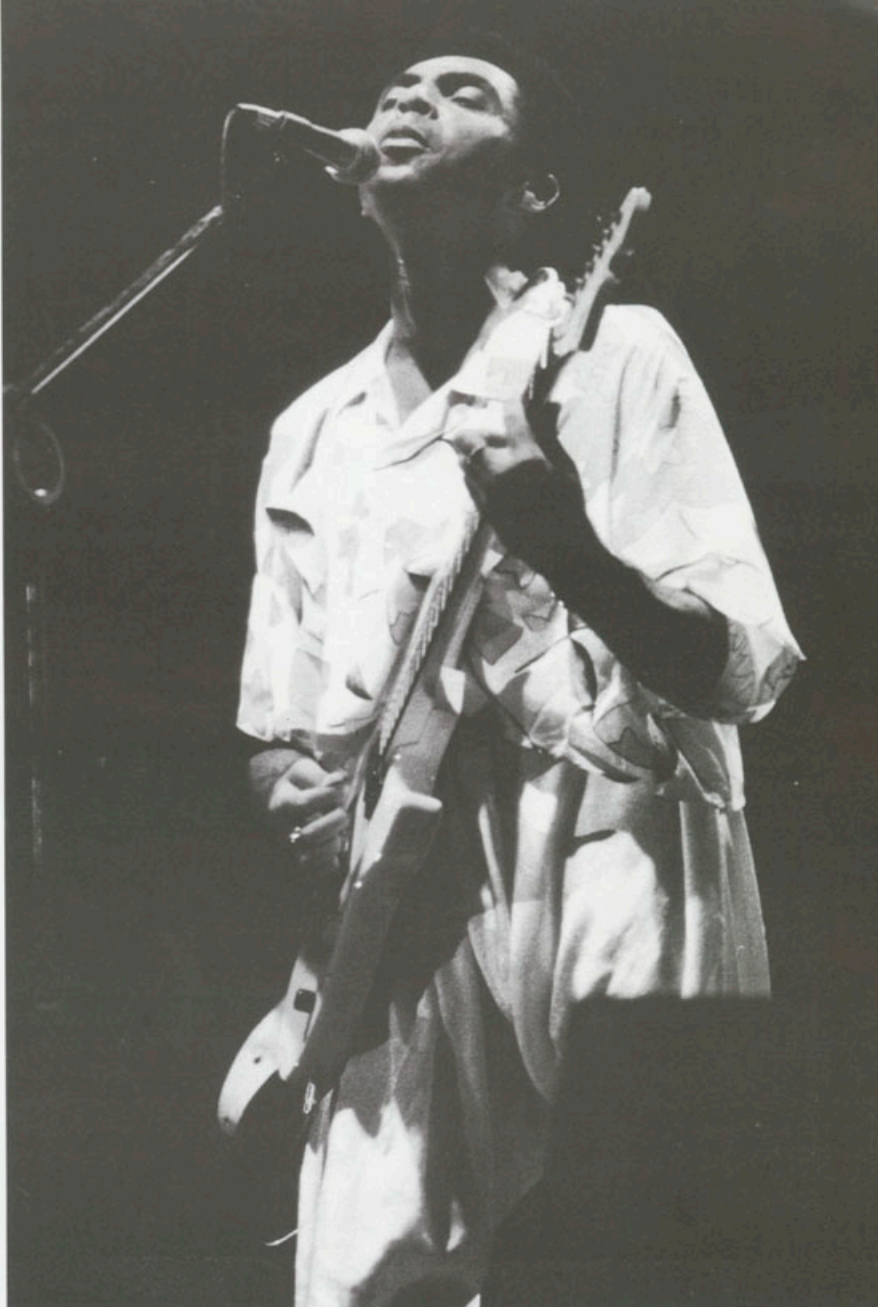


今年のヨーロッパ公演は大成功だった。6月、パリで開かれたアパルトヘイト抗議コンサート「SOSラジズム」に参加したあと、ソロコンサートを開いた。とくに7月1日から2日間、パリのオランピア劇場は連日超満員。パリっ子の度肝を抜いた。9月からは、全米ツアーも待っている。

そのほか、芸歴20周年の記念レコードの制作や、日本のフュージョン・グループ、カシオペアにも参加を求めるレーベル「ジェレイア・ジュラル」の発足にも手を染める。

そんな超多忙の中で、念願の日本公演が実現した。77年には日本をテーマにした「オリエント」を発表し、我が国への強いあこがれを表現しているジル。インタビューでも、「とにかく行きたくて仕方がなかった。伝統美と高度に発達した工業とが、みごとに調和した魅惑的な国だ。琴や尺八の音色にも大変興味がある」と、何度も繰り返した。

言葉の壁も、全く心配していない。「世の中が狭くなって、情報が多く入り込む時代。どこの国でも、異質の文化に対する違和感はなくなったはずだ。音楽の持つ抽象性が、言葉



を超えて理解されるようになったとも思う。それに、私は人間そのものを歌うのだから」
アメリカに継ぐ世界第二の音楽市場でありながら、ブラジル音楽に関しては残念ながら情報が極端に少ない日本。そんな“処女地”で、いよいよジルのステージが始まる。この機会を利用して、欧米の評価との大きなギャップを、一挙に埋めてほしいと思う。そして、「ブ

ラジルは今まで多くの日本人移民を受け入れてきた。今度は、日本人が私たちの文化を受け入れる番になってほしい」というジルの言葉通り、コンサートが聴衆との深い交流の場になることを願う。



TEMPO REI (時は王者) 1984年 シルベルト・ツル 作

私は夢に逃げこんだりしない
すべては手までのようでありつつけるだろう
時間と空間をめぐり 変えながら
すべての感情の海を渡りながら……
リオにそびえる山々の雲が暮なる
雨と水しぶきに打たれて
——暑い夜、暑い日
水が石におつかりつづけて
もう考えも残らないまでに消滅させる——
時は王者 おお王者なる時よ
古い生きかたを変えてください
父よ、私の知らないことを教えてください
永続するものをつかさざる母よ
考えを、意思を教えてください
人間だけがもてる感情を
一瞬にして変えてください
ポリシャ人にも、パイア人にも
もう人間の感情をつくることのできない
教育ママよ、親ばかパパよ
水が突然にこむことがあるのだ
だから夢にふけてはいけぬ
私は夢に逃げこまない
すべては、この今
この1秒だけそのあかりかたを保っているのだ
時は王者 おお王者なる時よ 時は王者



曲目解説

(音楽評論家) 高橋将美

第1部

1. レアルシ(輝き)

Realce

この曲は、1979年のアルバムで発表された。レアルシ(LPタイトルでもあった)についてジルは、総合的な光のこと、みんなに権利のあるきらめきの最低賃金である名もない光に名をつけること、集団的なよろこびのこと、誰にでもできる風に向かってただ歩いてゆくことのエクスタシー……というような説明をしている。(かえって解りにくいか?)

ポルトガル語辞書には「いちばん光っているもの」と載っている。——モジモジするな。人々にできることは、できる。できないことは爆発するだろう。力は荒々しいもの、力のみなもとで中立。だから突然みんなにできるようになる。イライラするな。人々の感じることは、感じる。愛情は火、火のありようは熱いということ。だから突然みんなは燃えるだろう。ガッカリするな。人生が傷つけるときは、傷つける、きらめきの感動のように。すると突然みんなは輝くだろう。レアルシ、レアルシ、ろうそく立ては多いほどいい。

2. 都会のあばら家

Nos barracos da cidade

わたしのイデオロギーは日ごとに生まれること、わたしの信条は闇を照らす光——そして都会のあばら家に住む人を苦しめる官僚あるいは政府への反旗がひるがえされる。決定をくだすのは、問題を前にして逃げだすお役人たち。おろか者、偽善者たち、もう治らない精神障害者たち。

以下、ずっとジルベルト・ジルの最新アルバム「ふたつの月」のレパートリーから(特記ないかぎりジルの作詞作曲)がつづく。

故郷バイアアの、遠い先祖の地アフリカの、そして母国ブラジルの土を踏んで、全世界の人々に訴えるジルの声の20年の総括がここにある。

3. ロゴス(理性)対ロゴ(商標)

Logos versus logo

タイトルどおり、後世にのこる正しいロゴスと、うたかたの繁栄をもたらす商業的なロゴの対比を歌う。ジルの歌詞は言葉の語呂合わせをよく使うが、内容もともなっている。

——詩人と呼ばれるからには、いちおうラジカルなアイデアをかかげ、でも仕事の僕(しもべ)となって、理性によって心を支配し、後世のためのロゴスを繁栄のロゴにとりかえる。これこそが大都会の役割、これこそが現代性の役割。

4. クリシェのクリシェ(キマリすぎ)

Clichê do clichê

ジルがこの曲を合作しているヴィニシウス・カントウアリアは、ジルと同郷の長年にわたって同志として結ばれている音楽家カエターノ・ヴェローゾのグループでずっとギターを弾き、今はソロ歌手として活動している。クリシェ(使い古された、おきまりの手法)なんかごめんだという、シャレた愛の歌である。——塩の効いてないおセンチな映画みたいに、ぼくは泣く気はないよ。愛が死んだふりはしないよ。俗なドラマはもうたくさんだ。日本の演劇《能》……そこでは俳優は同時に女優でもある。おなじ裸にまとう衣装。……ぼくはベルモンドで気狂いビエロ、そんなのはフランス映画だけさ。きみはバルドーで、シャンブーの宣伝、そんなのはテレビでしか良くないよ。それよりも、普通のぼくたちの役割りを生きようよ。自分の幸福と自分の不幸を演じようよ、吉本も監督もなく。ぼくたちのなりたくないものの役をするのはもうごめんだ。クリシェの中のクリシェというカップルになるのはやめよう。

5. ヴァモス・フジール(逃げだそう)

Vamos fugir

ここから再びグループ《パンダ・ウン》との共演になる。第1部で歌われた曲と2部の最初の2曲は1985年の最新アルバムからのレパートリーだが、今度のまず2曲は84年のアルバム「人類」から。

この曲はロック・ギタリストでレコード・プロデューサーでもあるリミーニャと、ジルが合作したもので、レコードではジャマイカのザ・ウェイラーズと共演したレゲエ風ナンバー。——この場所から逃げだそうよ、ペービー。君に背負ってもらうのを、ぼくは待ちくたびれた。ほかの場所へ逃げていこうよ、ペービー。君の好きなところへ、どこでもいいんだ。ぼくに君しか見えないところ、君にぼくしか見えないところ。太陽があればどこでもいい。君とぼくしか見えないところ。

6. 解放への祈り

Oração pela libertação da África do Sul

南アフリカ共和国が直接の対象だが、これはジルが10年来うたいつづけてきた理想境のあこがれの音楽だ。アフリカの伝説にある世界創造者は、ブラジルのインディオの造り主と同一化する。——ズールー王がもう裸で歩けないのなら、トウトウ司教の衣をたたえよう。おお、南アフリカの青い空により、貴い青い血をすべて真紅に変えてください。家畜のようにむち打たれた兄弟たちの流した血はすべて赤かったのだから。むちはもう壁に吊すだけにしてください。大地に育った者に大地を返してください。地図からすべての奴隷制を消し去ってください。

7. アケーリ・アブラソ(抱擁)

Aquele abraço

ジルがロンドンに亡命する前に、ブラジルの若者に残していったサンバ。(69年)

リオはいつまでも素直でありつづけると、歌い出し、「ブラジル国民全員に、あの抱擁を！」と終わるまで、ブラジルの人気者たちがたたえられる。それらは、フラメンゴ(サッカー・チーム)、シャクリーニャ(TVの太ったコミックな司会者)、パンダ・ジ・イバネマ(カーニバルのダンス集団)、ポルテラ(カーニバルのパレード・チーム)、バイアアなど。

8. マラカトゥ・アトミコ

Maracatu atômico

バイアア出身の若い詩人ジョルジ・マウチネルと、音楽家ネルソン・ジャコビーノの合作。マラカトゥは、アフリカのお祭りの式典ダンスとそのリズム。サンバや、リオのカーニバルのパレードにも影響を与えた。バイアアでは、トリオ・エレットリコといて、エレキ・バンドがカーニバルに街じゅうを踊らせるが、そのサウンドをとり入れた曲。

——摩天楼の後ろには空がある。その向こうに星のない空。……傘の上に雨がある。そのしずくの美しさ、食べてしまいたいほどさ。……避雷針の底には雷がある。嵐の黒い雲から落ちてきた。黒い絵はすべて真っ黒、ぼくはそこに君の名を書く。ぼくの気持ちをこめて。……マラカトゥの行列の先頭で旗をもつ娘。彼女は芸術家だ。いま通り過ぎるパレード、伝統をもった、原子時代のマラカトゥ。





第2部

1. オリエン

Oriente

子供のころから、何も知らないままに日本にあこがれていたというジルベルト・ジルが15年ほど前に作った曲で、当時は女性歌手エリス・レジーナのレコードによって知られた。タイトルには“東洋”と“方角を定める”の両方の意味が掛けられている。自分で方角を定めて、太陽の沈むところを見るために日本へ貨物船で行くこともできるのだと、若者の心をげます、美しく短い詩。

2. フローラ

Flora

ジルベルト・ジルの81年のアルバム“月の光”から、奥さんに捧げて作った曲。フローラはラテン語で、花だけでなく植物すべてのことだ。

——年経たおまえを思うのだ。すべて葉は深ぶかと繁り、今の枝は何倍にもふえて豊かなおまえを。イメージの花と果実とともに、わたしは旅していく、おまえの名前の王国の中を、おおフローラ。……未来のおまえを思うのだ、ずっと美しく、成熟して、アモール(愛)とアモラ(いちご)の純粋な味。やさしさと美の中に燃える光。わたしはきっとおまえの影の下で夢を見るだろう、おおフローラ。

3. ほくはアメリカに夢中

Soy un loco por ti, América

トロピカル派と名乗った音楽運動の自由な感性を示す曲のひとつ。歌詞はポルトガル語とスペイン語をまぜて連帯のメッセージ、リズムはいろんなカリブ海音楽のフュージョンである。タイトルのアメリカとは、ラテンアメリカのこと、USAではない。ジルベルト・ジル、カピナウン、トルクアート・ネットが68年ごろ合作。

——ぼくは君に夢中、ラテンアメリカの白い水泡。空が国旗になる。雲のような微笑、川、歌、不安、星にみちた肉体。この名もない国こそが、ぼくの愛人。彼女を知りたくてぼくは燃えている。未来のために死んだ人の名を歌ってくれるような、そんな朝をぼくは待っている。悲しい言葉はいやだ。死んだ人の名、それは民衆。いつの日か、ぼくは死ぬだろう、想い出とすすり泣きの中で、愛してくれる女性に抱かれて。それは農村の娘か、ゲリラ女戦士か、マネキンか、ぼくを愛して

くれるひと……。

4. エスプレッソ2222

Expresso 2222

ジルベルト・ジルがイギリスへの亡命から帰って来た1972年の大学キャンパス・コンサート・ツアーで発表した大ヒット曲。ここにはロックなどの外国の影響もあると同時に、歌詞の言葉のリズムがすでに音楽になっているジルの特徴もよく出ている。——特急2222が運行を始めた、ブラジル中央鉄道から2000年の後へ向かって。もうたくさんの人が先がけて、そっちに向かって発ったそうさ。2001年へ、2002年へ、この時の道が続くところまで。もう特急に乗った人の話では、昇り道の終着駅は、火と水と塩の中に生まれた母なる大地にあるそうさ。特急はこのリオのコルコヴァード山の登山電車に似てるそうさ。でも入って座るとすぐ走り出す。はてしなくつづく輝くレール、空に向かって昇っていく、輝く雲のヴェールの中、空に向かって……。

5. テンポ・レイ(時は王者)

Tempo Rei

人間の訴えて変革できないものを、時が変えてくれるという哲学。(歌詞はカラー・ページに)

6. サラ・ミオロ(ちぢれた金髪)

Sará miolo

ブラジル北東部では、混血による不思議な現象で、黒人のように髪がちぢれていながら金髪という人が出る。フォークダンスのリズム(このリズムはレゲエではなく、ブラジルのショッチです)を使って、ユーモアと人なつこさにあふれた曲。

サラ、サラ、サラ、サララ……そんな白人病は治しなよ。もう金髪なのに、その上にまっすぐな髪を欲しがらなんて。そういう、ちぢれた硬い髪こそ、ブラジルの土地っ子になくしてはならないものなんだ。

7. ウン・バンダ・ウン

Um banda um

ジルベルト・ジルと共演のグループは《バンド・ウン——バンド・1》と名付けられているが、その名乗りをあげた1982年のアルバムで発表された曲。楽団名がそのままリズム・パターンになるところがジルらしい。単純な楽しい音楽を、という彼の主張が生きた、みんなを乗せる曲だ。

——バンド・ウンの演奏は、ポルカみたいなスイング、ルンバみたいなスイング。バン

ダ・ウンはアフリカであり、バルト海でありケルト海。それは南アメリカのバンド、地球のすべてにあるダンスを思い起こさせる。バンド・ウンは誰にも快くひびく、世界の上を飛んでゆく。スケートに乗ったバンド、生まれ出る朝の波の上でサーフィン。

8. ほくの仲間に手を出すな

Touche pas à mon pote

フランスの人種差別(アフリカやアジアの血に対して)反対の運動の標語をタイトルにして、フランス語で作った曲。宇宙の力は黒人テニス選手ヤニック・ノアも、白人哲学者サルトルも同じように動かしているのだと歌う。民族や種族を超えた大いなる力——リズムはアフリカン・ポップのようでもあり、フランス系のカリブ海の国ハイチの音楽のようでもあり……。

9. すべてのバイーア娘たち

Toda menina baiana

すべてのバイーア娘たちは、生まれつきの魅惑をもっている。欠点もまた生まれつき。良きにつけ、悪きにつけ、なんでも神様がくれた。最初の絶望したインディオ、最初のカーニバル、最初の道、最初の奴隷市場もまた……。

10. ノー・ウーマン、ノー・クライ

Não chore mais (No Woman, No Cry)

レゲエの枠を超えて全世界の若者に大きな精神的影響を与えた、ジャマイカの偉大な歌い手ボブ・マーリーの代表曲に、ジルがポルトガル語歌詞をつけたもの。彼の作品といえるほどに消化されていて、ブラジルで大ヒットした。——おれの思い出のなかに、あそこすわっていた人たち。太陽の下、平地の草の上で、まわりを回っている仮装した偽善者たちを見つめていた……。とらわれの友たち、こうして消えて行き、決して出てこなかった友たち。こんな回顧は、うしろに捨てていこう。ナウン、もう泣くな…… あそこすわっていた人たち。紙を燃やして小さな火をたき、星を見つめていた。パンをあたたため直し、君と一緒に食べよう。明日の足が道を踏みしめる。おれは生きることのハンドルを知っている。すべて、すべては立ちあがる。ナウン、もう泣くな。

BANDA UM バンダ・ウン



メンバー紹介

セルジーニョ・トロンボーン

Serginho Trombone

【トロンボーン】

リオデジャネイロ出身、46歳。12歳からリオ郊外のダンス・ホールで演奏を始め、同時にアレンジと作曲を習得する。現在USA在住のドン・サルヴァドールのグループでピアノも修得。今までにガル・コスタ、リタ・リー、マリーナ、シモーネ、ジルのグループでトロンボーンとアレンジを担当、インスト・グループでもアントニオ・アドルフオやマルシオ・モンタローヨスのレコードにも参加している。もちろんバンダ・ウンのアレンジも担当している。

パウリーニョ・トランペッチ

Paulinho Trumpete

【トランペット】

リオデジャネイロ出身、38歳。8歳からトランペットを始め、22歳の時ヨーロッパへ渡る。パリでタニア・マリアのグループなどと演奏した後、スイスで自身のグループ“ボア・ノヴァ”を率いて活躍した。'80年から4年間ニューヨークでテディー・ジョーンズのオーケストラで演奏していたが、その後ブラジルに戻り、チン・マイア、ガル・コスタ、リタ・リー、エルバ、ジョアン・ドナート、レニ・アンドラーヂ、アジムスらと演奏活動を続けた。'85年末からジルのバンダ・ウンに参加。

ラウル・マスカレーニャス

Raul Mascarenhas

【サクソス、フルート】

ミナス州出身。33歳。ニューヨークでパウロ・モーラとサクソスを勉強、19歳の時プロ・





デビュー。1年ほどブラジル交響楽団にフルート奏者として在籍したこともある。75年から半年間パウ・ブラジルのメンバーとしてパティで活躍した他、ネイ・マトグロッソ、ガル・コスタのショーにも参加している。ファギネル、モライス・モレイラなどのレコードやショーに参加した他、エルメート・パスコアルのバンドに2年間いたこともある。'84年8月からバンド・ウンに加入。

リカルド・クリスタルチ Ricardo Cristaldi

[キーボード]

サンパウロ出身、35歳。現在のブラジル音楽界で人気最高のキーボード奏者、プロデューサー、アレンジャー。24歳の頃からプロとして活躍、人気を獲得している。ジョルジ・ベン、ネイ・マトグロッソ等とヨーロッパ公演を果たした後、'84年から'86年までカエターノ・ヴェローゾのバンドのリーダーをつとめ、NYのカーネギー、ヨーロッパ公演などを成功させてきた。彼のプロデュース作品にはガルの「ベン・ボン」やカエターノの「ヴェロー」などがある。今年6月からバンド・ウンに参加した。

ペリーニョ・サンタナ Perinho Santana

[ギター]

バイア州サルヴァドール出身、38歳。最初サルヴァドールで、ロック・バンドやボサノヴァ・トリオでドラムを叩いていたが、24歳でリオに出てギタリストとなる。ジルとはすでに'76年から、ショーとアルバム「やさしき野蠻人達」「レファヴェーラ」「レアルシ」に参加しており、ナイジェリアの黒人芸術文化フェスティバルにもジルと同行。またガル・コスタの海外公演、カエターノ・ヴェローゾ



の以前のバンドでも活躍していた。人気グループのア・コル・ド・ソンの現メンバー。

ジョルジーニョ・ゴメス Jorginho Gomes

[ドラムス]

サルヴァドール出身、31歳。ドラマーだがカヴァキニーニョ、バンドリン、ベース、パーカッションもこなす。16歳の時バイアアで、ジルやカエターノとともに演奏。兄ベベウ・ゴメスとグループを組み、その後ノーヴォス・バイアノスを結成。このグループ出身の兄ベベウやモライス・モレイラ、ベイビー・コンスエロのほか、バイアアのカーニバルの伝統的エレキバンドであるトリオ・エレクトリコ・ドドーとオズマル、ジルのバンドに参加。現在ア・コル・ド・ソンのメンバーで作・編曲もこなす。

ルバウン Rubão

[ベース]

エスピリトサント州出身、37歳。'60年代末、ギタリストのエリオ・デルミーロとグループを組み、音楽家としてのキャリアをスタートさせた。ジョルジ・ベンとのバンドのほかガル・コスタ、カエターノ、エルザ・ソアレス、ファギネルほかのアーティストのショー、アルバムに参加。また自作曲が'80年のMPBフェスティバルで高く評価された。ジルとは'74年からずっと行動をともにし、数々の海外公演すべてに参加している名手。

レポーリオ Repolho

[パーカッション]



ペルナンブコ州レシフェ出身、30歳。17歳のときからパーカッショニストとしての本格的活動を始める。23歳でリオデジャネイロに出て、ジョニー・アルフ、ナナ・カイミほかのアーティストのバックで活躍した。'81年、ジルベルト・ジルとの最初の仕事であるショー「月の光(ルアル)」で全ブラジルツアー。またガル、ミルトン・ナシメントの「キロンボのミサ」にも参加している。ジルのステージでは、エネルギッシュなパーカッション・プレーが見どころ。

青木 誠

[司会]

音楽評論家。学生時代から、クラシック、ジャズに傾倒。卒業後、音楽企画会社を設立したが、やがて音楽評論家として活躍し始める。FMやTVの構成者としても幅広く活躍している。14年間に亘ってスイスのモントルー・ジャズ祭に出掛ける他、世界中を訪れて、ポピュラー音楽の流れを取材、'80年頃から世界のブラジル音楽人気をレポートしつつづけている。ブラジルにも2度ほど取材旅行している。

スタッフ

- 音 響 ■ 吉識純一 [株ADS]
井上孝一 [株ADS]
楽 器 ■ 尾崎勝哉 [株ADS]
照 明 ■ 広川昭男 [株共立]
小林光四郎 [株共立]
美 術 ■ 工藤信隆 [術千曲舞台工芸]
機材運搬 ■ 工藤 昭 [プロジェクトV]
遂 行 ■ ミルトン佐藤 [ラティーナ]
舞台監督 ■ 斉藤憲三 [ラティーナ]
制 作 ■ 本田健治 [ラティーナ]



混血の国、ブラジルの歴史



ブラジルの発見と 当時の産業

ブラジルは、1500年4月22日、ポルトガル人のペドロ・アルヴァレス・カブラールによって「発見」されることで、世界史の舞台上に登場する。しかし、このブラジルにはおよそ3万5千年以上も前の氷河期にシベリアとアラスカを隔てるベーリング海峡が凍結した際、この海峡を渡って来たアジア系の先住民インディオ約200万人がすでに居住していた。(ブラジルに現在住むインディオは18,000人から20,000人といわれている)

征服者ポルトガル人の、この土地への関心はいえ、当初は、パウ・ブラジルという染料になる原木をヨーロッパに供給することだけだったが、1570年代から、北東部のペルナンブコ州とバイア州に砂糖産業が起り、以降約100年の間に、ブラジルは世界最大の砂糖生産地となった。当時のポルトガル人たちは、最初インディオを奴隷化して、この砂糖産業を支えたが、採集経済、単純労働しか知らなかったインディオは内陸へ逃れ、あるいは殺され、インディオ人口は激減した。

植民地時代の バイア州サルヴァドール

ブラジルに「砂糖の時代」がやってくる少し前の1549年に、バイア州の中心地であるサルヴァドールに総督府と海軍基地が置かれた。サルヴァドールは、リオに遷都される1763年までの間、植民地全体の行政と軍事の中心であり、同時に北東部沿岸地方の経済的基地としての機能をもたうことになった。このサルヴァドールを中心とするブラジル北東部は、地味肥沃であると同時に、帯状に森林が続いているために砂糖製造に必要な大量の薪炭の入手が容易であり、かつ地質がマサッ

ペという粘土質の腐食土で、サトウキビ栽培の最適地であったことから、1570年代を契機として、ここに大砂糖ブームが起こったのである。

黒人奴隷の輸入

インディオ人口の激減で、1570年、砂糖産業を支える労働力として、アフリカから黒人奴隷が輸入されるようになった。その奴隷貿易の中心になったのは、やはりバイアの港であった。砂糖産業にかけがえのない1670年頃までにブラジルに輸入された奴隷の数は約40万人と言われる。この時以来、1888年、奴隷制が廃止されるまで、ブラジルには少なく見積もっても350万人、あるいは1000万人ともいわれる黒人奴隷が輸入された。奴隷たちの主な出身は、熱帯アフリカ、ギニア湾地方、コンゴ、アンゴラのバントウ系と、西アフリカのスーダン系、それにイスラム化したギニア・スーダン系に分類される。16世紀まではスーダン系が多く、特にナイジェリアのヨルバ族は聡明で体力もあり、従順だったので、需要が多かった。イスラム化した黒人のハウサ族はきわめて反抗的で、白人に抵抗した。17世紀以降はバントウ系が多くなる。彼らはスーダン系よりも文化的に劣るが、数の上で圧倒的に多かったので、ブラジルの生活のさまざまな側面にその影響をおよぼしている。

奴隷輸送船の中

奴隷輸送船は初期は100トン、200トンといった小型帆船が多く使用され、一度に300人から500人を運んだという。当時、アンゴラからバイアまでおよそ40日近くかかったが、その間黒人奴隷たちはまったく日の当たらない薄暗い船倉に閉じ込められて過さなければならなかった。それでも女たちは一日に一回だけ甲板に出て太陽を浴びることを許されたが、

男たちは、うだるような暑熱と、排せつ物や汚物の悪臭の中で、まさに地獄の日々を過ごしたといわれる。だから、天然痘、赤痢、壊血病などの伝染病が発生するとただ死体として海中に投棄されるだけだった。初期には一航海で4割か6割近い死亡者を出したといわれている。1724年におけるある航海では、反抗した黒人奴隷(女)を帆柱に縛りつけ、その身体の内を切り取って、他の黒人にむりやり食べさせたことがあるという。

奥地探検隊と 『黄金の時代』

北東部海岸に沿って垂直的にブラジルの領土を拡大したのが砂糖農場主であるとするなら、水平的に領土を征服していったのはバンデイラと呼ばれる奥地探検隊であった。彼らは18世紀にほぼ現在のブラジル国境の輪郭を描くことに成功する。

一方、17世紀後半からの砂糖経済の不振はポルトガル本国経済にも打撃を与えた他、ヨーロッパ全体がスペイン領中南米の銀山の枯渇による深刻な貴金属不足に悩まされていた。

バンデイラはこの貴金属の発見と、インディオ奴隷の捕獲を目的に奥地を探検するポルトガル人、マメルコ、インディオからなる武装集団である。(マメルコ=植民地時代初期にブラジルに渡ったポルトガル人は男性ばかりで、家族を同伴しなかった。このために白人女性が相対的に不足し、植民地のポルトガル人と先住民インディオ女性との間の異種混交が促進されることとなった。この結果、マメルコと呼ばれる混血人種が最初のブラジル人として誕生した。)

1693年、このバンデイラたちによって、ついに現在のミナス・ジェライス州で待望の金脈を発見することに成功した。その上、1729年からは金に次いでミナス、マトグロッソ、バイアの各州で大量のダイヤモンドが発見



〈公演日程〉

1986年

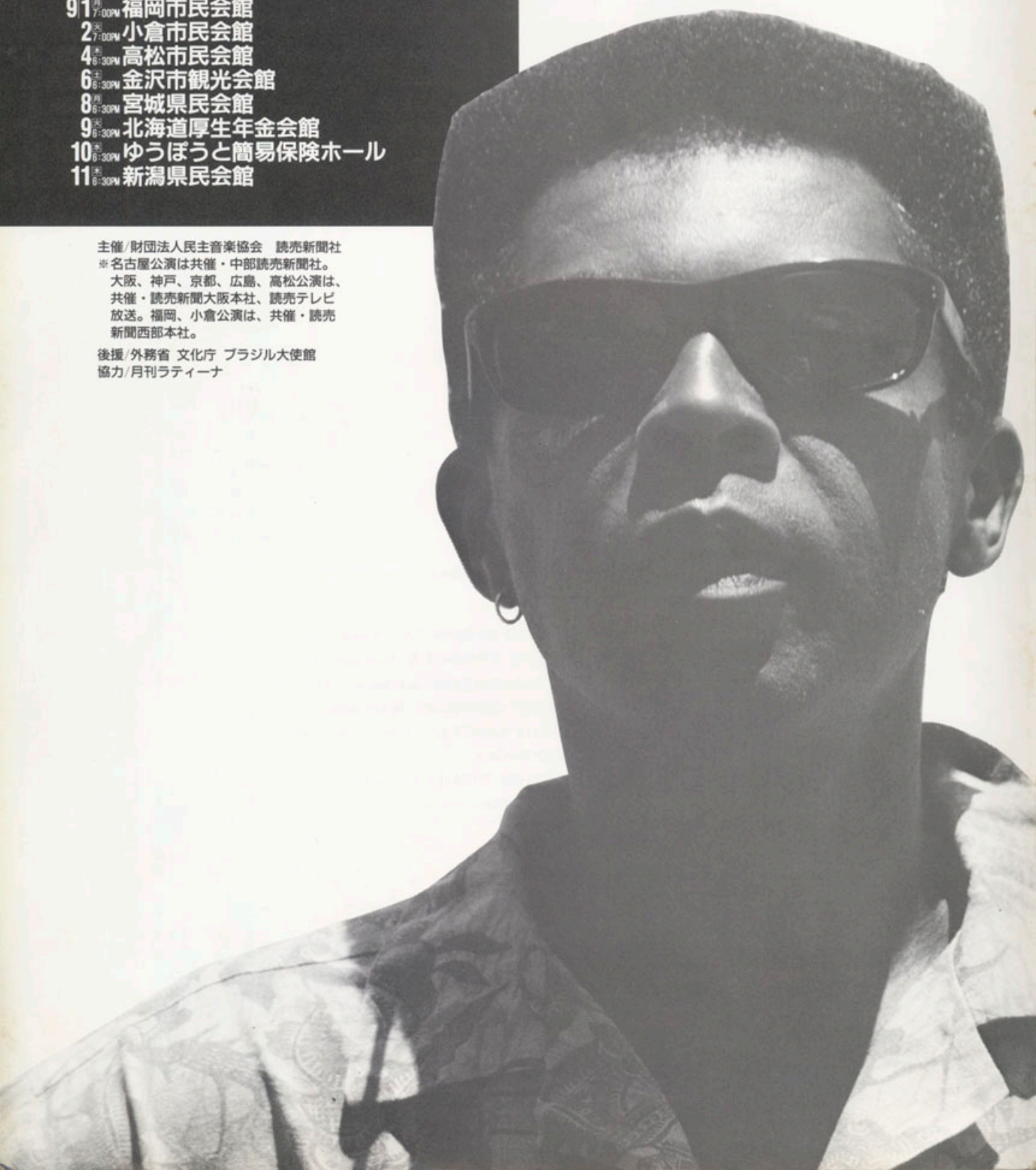
- 8/20^祝 東京厚生年金会館
21^祝 神奈川県民ホール
23^日 名古屋市民会館
24^日 神戸国際会館
25^祝 京都会館第1ホール
26^祝 大阪・フェスティバルホール
28^祝 千葉県文化会館
30^日 広島厚生年金会館
9/1^日 福岡市民会館
2^日 小倉市民会館
4^日 高松市民会館
6^日 金沢市観光会館
8^日 宮城県民会館
9^日 北海道厚生年金会館
10^日 ゆうぽうと簡易保険ホール
11^日 新潟県民会館

主催/財団法人民主音楽協会 読売新聞社

※名古屋公演は共催・中部読売新聞社。

大阪、神戸、京都、広島、高松公演は、
共催・読売新聞大阪本社、読売テレビ
放送。福岡、小倉公演は、共催・読売
新聞西部本社。

後援/外務省 文化庁 ブラジル大使館
協力/月刊ラディーナ





され、ブラジルは空前の繁栄を遂げることになる。

ブラジルの金は、ほとんど堆積砂金だったが、貯水池をつくって水をため、大量の水を一気に流出させて金を含んだ母岩を崩し、金を採集するという大がかりな洗鉱法によっていたため、多数の労働力を必要とした。そこでまた、奴隷の輸入である。18世紀全体で、少なくとも170万人の黒人がアフリカから輸入された。

ブラジルの近代化の芽生えと独立への機運

砂糖と金の時代に大きく発展したブラジルが近代化されるのは、ゴールド・ラッシュが終わりを迎える頃からである。そして、そのきっかけは17世紀のイギリスで生まれ、18世紀のフランスで展開された啓蒙思想である。さらに、ブラジルと同じように本国イギリスからの重圧にあえていたアメリカが、1775年独立戦争を起こし、1776年、民主主義国家の建設に成功したことは、ブラジルの知識人たちに、ブラジルの独立に対する夢を大きくかき立てさせた。1789年のフランス革命も、独立を目指すブラジル人たちを刺激した。

一方、17世紀以来ポルトガル本国の経済は衰退する一方で、ますます植民地依存の色を濃くしていた。19世紀初頭、ヨーロッパ大陸の過半を制覇したナポレオンは、征服されざる国イギリスに対して1806年、ベルリン勅令を出し、ヨーロッパ大陸諸国がイギリスと通商することを禁じた。

ところが、イギリスに大きく経済依存し、軍事基地まで提供していたポルトガルは、ナポレオンの脅威を感じながらもイギリスを敵に回すことはできなかった。1807年、そんなポルトガルに対してナポレオンは怒り、ポルトガルに対し武力進攻を開始した。

これに慌てたポルトガル政府は、ポルトガ



ルの防衛をイギリスに任せて、王室と政府をブラジルにうつすことになった。この本国の王室、政府の植民地移転という珍事件によって、ブラジルは単なる植民地から大きく変貌し、本国と同地位になることができたのである。ブラジルはこうして独立への道を歩みはじめた。

ブラジルの独立

やがて、ナポレオン政権が倒れ、イギリス人將軍に本国を支配されていたポルトガルの残留上流階級者は、革命を起こして、イギリスの將軍を倒し、ブラジルから国王呼び戻すことになった。ブラジルには皇太子ドン・ペドロが摂政として残ったが、やがてポルトガルの上流階級者は、ブラジルに対する本国の優位性を回復しようと、皇太子を帰国させてブラジル各州を本国政府の直轄にする決定を下した。

この決定はブラジル植民者たちを激怒させた。彼らはドン・ペドロを説得して帰国を拒否させる一方、本国政府からの完全独立を図った。

1822年8月7日、サンパウロ市郊外イビランガの丘で、ドン・ペドロは2通の手紙を受けとった。1通は本国政府からの帰国要請のものであり、もう1通は植民者の大立者ジョゼ・ボニファシオからの、独立宣言を強く要請したものであった。この2通の手紙を読み終わったドン・ペドロは、帽子についていたポルトガル軍隊の帽章をむしりとりて地上に投げすてるや、馬上高らかに「独立か、それとも死か」と叫んだ。いわゆるブラジル史上に有名なイビランガ丘の叫びがこれである。

奴隷制度の廃止

ブラジルの奴隷貿易廃止は、ブラジルの独



立当時、ポルトガルにもブラジルにも経済的影響を与えていたイギリスの圧力によってなされた。表面上は、これを推進したのはイギリスの産業資本家たちの人道主義であり、民主主義であり、自由主義であったといわれるが、じつは、当時のブラジルの社会体制が、ブラジルを大きな輸出マーケットにしようとする産業資本家たちにとって都合が悪かったことが一番の理由である。まず莫大な人口の奴隷たちは、一銭の金も自由にならない。これでは良いマーケットになろうはずもない。次に、奴隷制度で生産されるブラジルの安い砂糖が、逆にイギリス植民地で賃金労働によって生産される砂糖を圧迫している。さらに、やはり広大なアフリカ大陸全体をイギリス商品市場にしようとしているイギリスにとって、莫大な数のアフリカ黒人をブラジルに運ぶ奴隷制度はどうしても具合が悪かったのである。

これらの理由から、イギリスはブラジルに対して強硬に奴隷制度の廃止を要求した。1831年、ブラジルはついに奴隷貿易禁止令を發布し、黒人奴隷の自由を宣言した。が、実際にはブラジルにその意志はなく、その後のコーヒー景気を支えるために、裏で奴隷の輸入がうなぎ昇りに増えていった。しかし、イギリスだけでなく、世界中に高まる奴隷貿易への批判に、1850年、ついに奴隷貿易はその終章にピリオドを打つのである。

そして、この奴隷貿易の全面禁止は、奴隷貿易にかけていたかなり巨額の資金を国内産業に回すことになって、ブラジル経済は一挙に近代化され、発展するようになった。

かくして1888年、奴隷貿易だけでなくブラジル内のすべての奴隷制、奴隷法が撤廃された。



folklore・ファン待望のチャランゴ王初来日!!

現代最高の天才チャランゴ奏者!

ハイメ・トーレス

9月16日から全国35回公演!!



JAIME TORRES

ハイメ・トーレス [チャランゴ]
エドゥアルド・ラゴス [ピアノ]
ラウル・オラルテ [ケーナ]
ノルベルト・ペレイラ [ギター]
ホルヘ・ゴルディージョ [シーク]
アドリアーナ・オビエド [女性歌手]

主催 ■ 財団法人民主音楽協会
後援 ■ アルゼンチン大使館
協力 ■ 月刊ラティーナ



お問い合わせは全国の民音事務局、または月刊ラティーナ ☎03-446-1225まで。

世界のタンゴ・ブームの中、'87年春の
民音タンゴ・シリーズは最高の人気歌手とタンゴ楽団が
決定! 古典タンゴの名曲ばかりを、歌と踊りと演奏で、
タンゴのすべてをたっぷり味わえます!!

エンリケ・ドゥマス ホルヘ・ドラゴネ・タンゴ楽団



ENRIQUE DUMAS JORGE DRAGONE

'87年1月から全国50以上の都市で公演決定!

[出演] エンリケ・ドゥマス [男性歌手]
ホルヘ・ドラゴネ・タンゴ楽団
クアルテート・デル・センテナリオ
パレエ・アルヘンティーナ

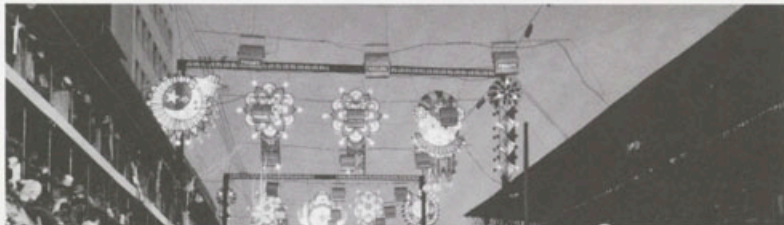
●お問い合わせ先—
☎(371)5101代
財団法人民主音楽協会

LATINA

ラティーナ

もよりの書店でお求めください。

定価 450円
発行 ● 中南米音楽
〒150 東京都渋谷区恵比寿1-13-6



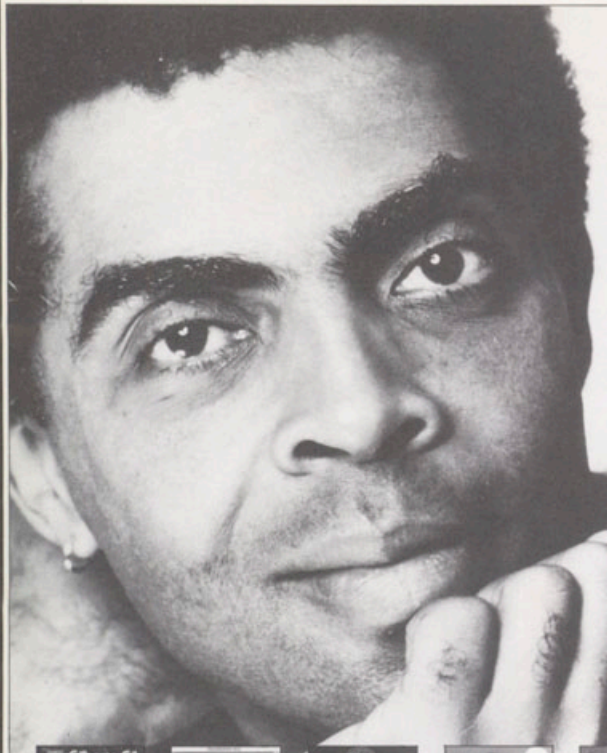
ブラジル音楽、レゲエ、サルサ、folklore、タンゴなど第3世界のホットな音楽情報を満載した唯一の月刊誌!!



人気沸騰の直輸入盤! ブラジル、アルゼンチン、USA、ヨーロッパの最新盤、随時入荷!

ラティーナ代理部
☎03-446-1225

*最新盤入荷の情報は、月刊ラティーナ誌に掲載しています。



サンバの地に生まれ、サンバを愛し、
そしてサンバを救った男。ジルベルト・ジル。



ジルベルト・ジル
GILBERTO GIL/DIA DORMI NOITE NEON
ふたつの月

来日記念盤

ラテン・ミュージックの粋を越え、今や世界的な舞台で活躍。1985年プラジカ録音、最新録アルバムここに完成。
●制作：リミーニャ ●ミュージシャン：ジルベルト・ジル(g.vo), リミーニャ(g.), ペドロ・ジル(kb), ジョルジャン・バレート(key), マルサル(perc), ゼール・イス(sax) 他
●P-13292 ¥2,800 ●歌詞対訳付 ●好評発売中 wea



ライヴ・アット・モントルー P-5569 ¥1,800



ナイチンゲール P-10831 ¥2,500



レアシル P-10786 ¥2,500



月の光 P-10771 ¥2,500



ウン・バンダウ P-11231 ¥2,500



エキストラ P-11449 ¥2,500

THE FINEST RESONANCE "THIN SHELL" ARTSTAR



よく笑い、よく泣き、よく語るドラムについて話したいと思う。そのために、雜誌に載っている、「よく語る」ドラムの理論、つまり、「薄りの科学」とは一体何なのか、を知ることは重要だと思うが、いかがなものか。ファクトリーに長年勤め上げ、常に変わるクラフトマンシップを期して生きてきた純粋なエンジニアの声を伝えることなど、このコマースリズム万端の時代にいざさかうんざりされることかもしれないが、我々はそのことを恐れない。いや、寧ろそこそこのようなことが必要だと思うのだ。理論は必要なのだと思う。例えば、きみがきみのイメージするところのドラムプレイヤーにグロアップするために、豊富なフィードバックをたよりにし、非科学的態度でのぞむとすれば、まるで動くことよりの二流の職人に身を置かざるを得ない。ドラムの響りの理論は、大きく二つに分けられる。ひとつはヘッドに与えられたアタック音をストレートにサウンドさせるという方法である。また、他のひとつは、ヘッドに与えられた振動をシェルに伝え、そこでそのアクティビティを最大限に発揮させ、波形をアレンジし、サスティーンをプロデュースする方法。速達性に優れたバウフルなボイスリングを望むのか、それとも、ニュアンスに重んじられた響きを望むのか、どちらをとるかである。アートスターは後者を極限まで徹底して追求したモデルとし、しかも、音スケに、あるいは、サスティーンを極める覚悟のなさは、例えば、木目に対するシビアなセレクトが顕著に物語る。シェルの深さの方向にすべての運動性を集中するための徹底したタビ目主義とか、ブラインクのグリュー(埋蓋材)がサウンドをミューするケースを徹底して回避する詳細なメジャーメントなどに表われている。こんなタイトなドラムコンストラクションは他に類を見ないものだと思ふ。また、一般的なウォリシティに関する意識感、ウッドのシーズニング、あるいは、マテリアルに関するインテリジェンスにも、表わせばそれはコマースリズムを超えた次元を感じてもらえるはずだ。ドラムにとって基本的な命題ともいえる真円度の問題にもホルディアのBmという極薄シックスネスでそれと併せたTAMAの競争心は共感してもらえよう。その上でシックスネスBmは真円へのフィットネスの限界だと結論した次第だ。すなわちこれらは、TAMAがアートスターにキャストしたひとつの究極の完成品だ。

スーパー・シット、
シックスネスBmシェルが
アーティストの
アートを呼吸する
センスを呼吸する
究極のシックスネス。



このたびブラジルよりジルベルト・ジルを招へいし、全国で16回の公演を行うことになりました。

ジルベルト・ジルは、現代のブラジルを代表するシンガー&ソング・ライター&ギタリストで、ボサ・ノヴァの時代から現代まで、常にブラジル・ポピュラー音楽界の第一線で活躍しつづけているスーパースターです。

ブラジル国内はもとより、'82年からは毎年ニューヨークで公演を成功させつづけ、幅広い、インターナショナルな活動を展開しつづけております。

今回の日本公演では、新しいブラジル音楽のエッセンスを存分に披露してくれることになっております。

本公演の開催にあたり多数の関係者の方々のご協力をいただき、まことに感謝にたえません。本公演を通じて日本とブラジルの相互理解が更に深まりゆくことを心から願いたします。

財団法人民主音楽協会
読売新聞社

ヨーロッパやアメリカで絶賛を博したブラジルのシンガー・ソング・ライター、ジルベルト・ジルが此の度来日し、日本の聴衆を魅了することでしょう。

大衆の土壤に深く根差しているジルベルト・ジルは、一般的にはトロピカリズモと呼ばれる運動で、アーティストとしてその頭角を表しました。彼はその運動のリーダーの一員となり、ブラジル音楽を世界に紹介するために大なる貢献をしました。ジルベルト・ジルはブラジル全土で高い評価を得ていますが、彼の出生地であるバイーア州での人気はまた格別なものです。先日、そのバイーア州のサルヴァドール市より、市民の絶大なる祝福のもとに、名誉ある勲章が手渡されました。

アーティスト、ジルベルト・ジルは非凡にして開放的な人間性も持ち合わせており、その日本公演は聴衆に深い感銘を与えることと確信します。

L.P.リンデンベルグ・セッテ
駐日ブラジル大使

Gilberto Gil, cantor-compositor-letrista, já consagrado nos palcos da Europa e Estados Unidos da América, vem, agora, empolgar o público do Japão.

A trajetória artística de Gilberto Gil, de raízes populares, foi iniciada com o chamado "Movimento tropicalista", do qual foi um dos líderes e que muito contribuiu para a projeção internacional da música brasileira. O valor de Gilberto Gil é amplamente reconhecido no Brasil, em geral, e na Bahia, seu Estado natal, em particular. Recentemente foi condecorado pela prefeitura e pelo povo de Salvador, Bahia.

O artista Gilberto Gil, possuidor de uma personalidade marcante e extrovertida, ira, certamente, arrebatador aplausos calorosos à platéia japonesa.

L.P. Lindenberg Sette
Embaixador do Brasil

日本の聴衆のみなさんに私は大きな抱擁をおくり、日本の魂、古い日本の魂に対する私の大きな讃美の念を伝えたいのです。そして、みなさんに会いたいという私の期待は、ほとんどあこがれに近いものです。

私はもうずっと以前から日本を識りたいと、願ってきました。そして、みなさんとふれあいの機会をもてることにワクワクしています。私の音楽を、いちばん楽しいサウンドでお伝えしたいなと思っています。また、みなさんが私たちの仕事に満足していただけるようにと念じています。

早くお会いしたいですね。アリガトー!

ジルベルト・ジル

Ao público japonês eu gostaria de deixar um abraço muito grande e dizer da minha admiração muito grande pela alma japonesa, pela velha alma japonesa. E da minha expectativa grande, quase ansiedade, no sentido de conhecer vocês.

Tenho muita vontade de conhecer o Japão há muitos anos.

Estou assim ansioso mesmo para travar contacto com vocês. Espero passar a minha música da forma mais agradável possível. Espero também que vocês fiquem satisfeitos com o nosso trabalho. Até breve e arigatô.

Gilberto Gil

ジルベルト・ジルの軌跡

世界はMPB(ブラジル・ポピュラー音楽)の時代!

ヨーロッパやアメリカでは、数年前からブラジル音楽のブームと言われてきたが、今年

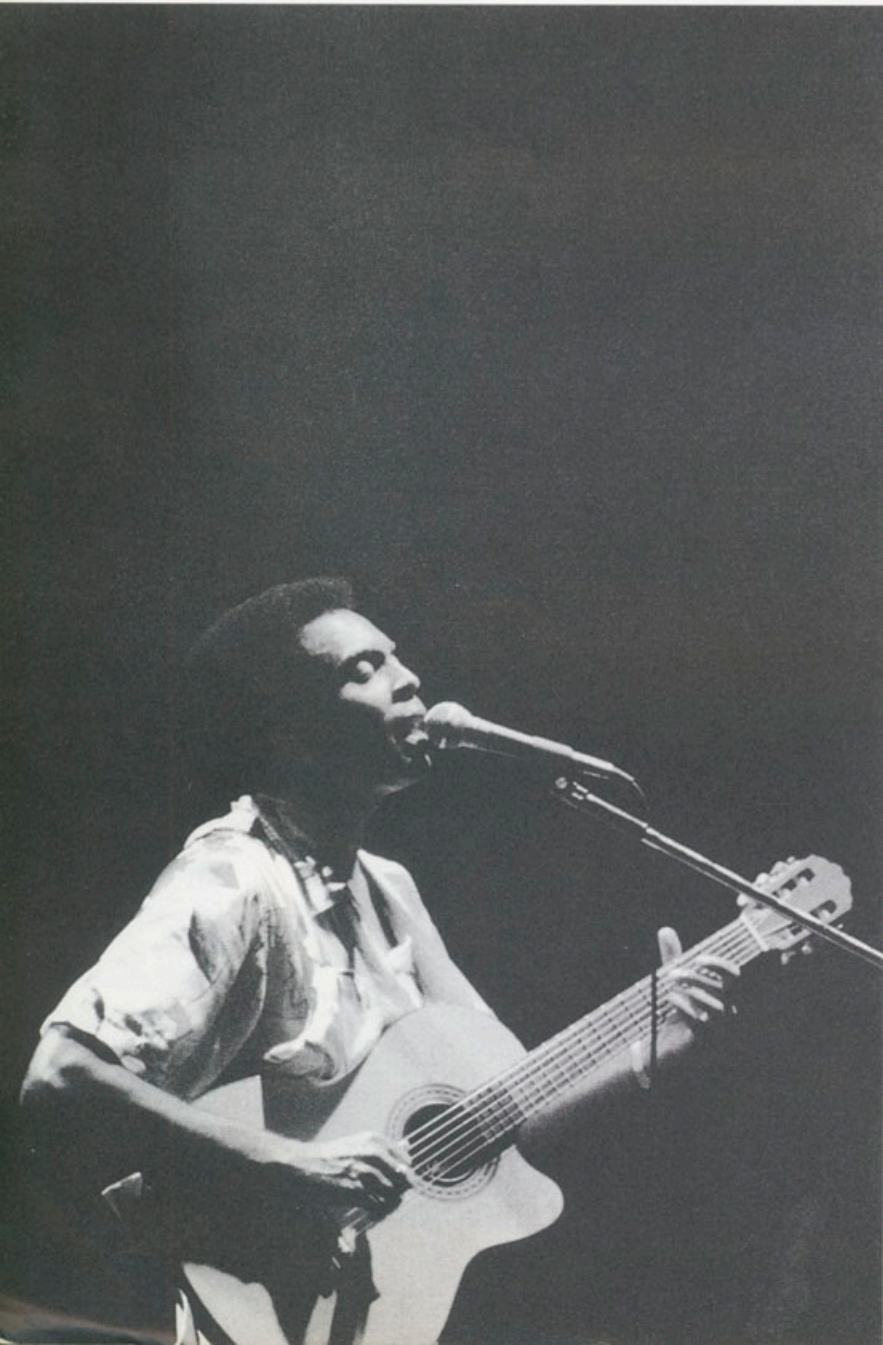
になってそのムーブメントは一段と強烈な様相を呈してきた。特にヨーロッパでのブラジル音楽ブームは尋常ではない。ジルベルト・ジル、ガル・コスタ、ジャヴァン、パウリーニョ・ダ・ヴィオラ、シコ・ブアルキ、マリア・ベターニア、バーデン・パウエル、ミルトン・ナシメント、パウロ・モーラ、エルバ・ラマリーヨ、ファファ・ヂ・ベレン、モライス・モレイラ、ルイス・ゴンザーガ、アルセウ・ヴァレンサ……ブラジルを代表するこのスターたちが全員、この夏はヨーロッパでコンサートをおこなって大反響を巻き起こしているのである。もちろん、この背景にはフランス政府とブラジル政府の文化交流協定が結ばれたこともあるのだが、それにしても、国の音楽界のスターのほとんどがこうしてヨーロッパ中を荒らしまわるなんてことは、今までにはなかったことである。

USAではヨーロッパほどではないにしても、この数年の間にジルベルト・ジル、イヴァン・リンス、カエターノ・ヴェローゾ、ガル・コスタなどが公演して大成功させている。USAでもヨーロッパでも、スペイン語圏のアーティストとは違ってポルトガル語系の移民は少ないから、公演を成功させるためには当然その国のファンを獲得する必要がある。その意味でも、ブラジル勢の活躍は本当に大きなパワーなのである。

さて、その恐るべきブラジル・パワーの中心にいるのが、今回日本で公演するジルベルト・ジルである。

ジルは'70年代初頭、ブラジルの軍事政権に追われて、ロンドンに亡命していたころからヨーロッパでコンサート活動をしていたから、もともとヨーロッパでのファンは多かったのだが、'80年頃からパリを中心に改めて人気が沸騰、昨年はオリンピック劇場で4日間の公演を成功させている。

昨年、パリでちょっとした事件があった。ジルの息子が黒人であるという理由でサンロー





(左)姉ジルヂーナとジル(右)

ランのブティックを追い出されたのである。ヨーロッパには、SOSラシズモという人種差別に反対する組織があって、ジルは即座にその組織に訴え、そのブティックの前で抗議集会を開いた。一貫して黒人文化の優秀性を訴えてきたジルのとった当然の行動だったが、これがヨーロッパの人々の共感を呼ぶことになった。

ブラジルに帰ったジルは、この事件をきっかけにして、SOSラシズモの合言葉「俺の仲間に出すな」というタイトルの曲をはじめフランス語で録音、新アルバムに収めた。このアルバムは今年の初め、ブラジルとフランスの両方で一斉に発売されたが（日本ではワーナー・パイオニアから発売中＝P-13292）、これが当然のことながらフランスでも大評判となった。

6月中旬に日本の新聞でも報道されたが、パリのバスチユ広場に20万人をあつめておこなわれたSOSラシズモ大コンサートには、ムスタキ、イヴ・モンタンなどのフランスの有名なほか、レイ・レマ、シェブ・マミ、カリム・カセルといったアフリカ系のミュージシャン、UKレゲエのUB40、そしてブラジルからジルベルト・ジルが出演していた。ジルはもちろん「俺の仲間に出すな」を歌い、今年のコンサートのシンボリックなものであったのである。そして7月1～2日のオランダを皮切りに27日間17コンサートというヨーロッパ・ツアー（7月6日のモントルー・ジャズ祭も含む）はかつてないほどの盛り上がりうちに終えた。

最前線を走り続ける ジルのプロフィール

本名ジルベルト・パス・ジル・モレイラ。1942年6月29日、ブラジル北東部バイア州サルヴァドール市生まれ。生後数か月で家族はやや内陸に移り住み、幼いジルはラジオか

ら流れてくるアリ・バローゾの曲や古いブラジル音楽を耳にしつつ育ち、3歳のときからパーカッションを叩き始めて両親を驚かせたという。

7歳の少年ジルは、家族に連れられてやってきたサルヴァドールのカーニバルを体験し激しいショックを受ける。そこに繰り広げられるエネルギッシュなパレード。ジルを感動させたのはトリオ・エレクトリコと呼ばれる一群だった。トリオ・エレクトリコとは、1950年頃からのこの街のカーニバルに登場した小型エレキギター、バイア・ギターを中心にした演奏スタイルのことで、現在では4トン以上もあるトラックの上にスピーカーやPA装置を満載してカーニバルの行進をリードする。ジルは即座にサンバのドラミングを修得、トランペットまでをも勉強はじめた。同年、ジルの家族はサルヴァドールに戻り住み、彼はここで中学時代を過ごす。多感なこの時期にギターやサンフォーナ（アコーディオン）を覚える。

1963年サルヴァドール州立大学に進んだジルは、そこでカエターノ・ヴェローゾ、マリア・ベターニア、トム・ゼーらと知りあい、本格的な音楽家活動を始める。'64年彼らにガル・コスタを加えて一緒に「たとえば我等」という、ボサ・ノヴァと古いブラジルの大衆音楽のコンサートを聞き、注目を浴びる。'65年にはサンパウロに進出、ジョアン・セバスチアンという酒場に出演しながら作曲活動を続けていたが、'66年、エリス・レジーナが彼の作品「ローヴァサウ」を歌ったことで一躍[ジル]の名は音楽シーンにとどろいた。ちょうどこの頃、ジルはビートルズの音楽と出会い、大いに影響され、作風もよりポップで洗練されたものになっていった。'65、'66年とサンパウロのTVレコルヂが主催するポピュラー音楽祭に上位入賞（「日曜日に公園で」は有名）し、MPB（ブラジル・ポピュラー音楽）シーンの第一線にジルは登場する。

トロピカリズムの 成果

当時、ジルらがサルヴァドール時代の仲間達と起こしていた音楽運動は「トロピカリズム（トロピカリア運動）」といい、「自国の伝統音楽の要素も受け継ぎながら、ビートルズなどを含めた世界の音楽の最新の成果をとりいれ、ユニヴァーサルなサウンドを目指す」というメッセージをブラジルに放った。この音楽運動が社会的に大きな意味をもったのには理由があった。'64年、ブラジルは軍事政権となり、音楽の世界にまで監視の目を光らせ、歌詞の検閲が行われ始めていた。したがってトロピカリズムは、まずそういった因習との闘いであった。ジルらが引きおこしたこの音楽運動は、他の映画や文学、政治の世界と連動して'67、'68年と衝撃的な高まりを見せた。しかし、トロピカリズムが盛んになったところで、政府は政令を發布し検閲を強化し、とくにそのリーダー的な存在だったジルとカエターノは半ば亡命のようなかたちでイギリスへ追われることとなる。ロンドンに渡ったジルは、とりわけエレキギターのテクニクを磨くことに専念し、ポップ・ディランをはじめとする当時のスターの新しい波に直接ふれ、影響を受けていた。英語だけによるLPもこの頃録音している。ロンドン生活時代の音楽活動はそればかりでなくヨーロッパにも開かれ、ジルは西ドイツ、オランダ、オーストリアで学生達に熱狂的に迎えられ、'71年にはニューヨークのオフ・ブロードウェイで15日間のコンサートを行い、批評家から絶賛を浴びることとなった。

父ジョゼーと母クラウヂーナとジル



ブラジル魂

1967年「ピリンバウとエレキ・ギター」の共演をグループ・ムテンチス、とやて反響を呼んだ。



世界の舞台を駆けめぐる 開放的ブラック・ミュージック from ブラ“ジル”

1978年、USA向けに録音したアルバム『ナイチンゲール』は79年の発売と同時にUSAの各地で爆発的な売れ行きを示し、3月から4月にかけての全米ツアーは大成功だった。さらにスイスのモントルーで行われたジャズ・フェスティバルに出演し絶賛を受け、このライヴは2枚組のアルバムで発売された。こうして押しも押されぬ国際的スーパースターの地位に輝いたジルは、79年に快作『リアルシ』を発表。このアルバムで初めてレゲエ曲「ノー・ウーマン、ノー・クライ」をとりあげた。ブラジル全土のツアーのあと、'80年5月、ジルはレゲエ界のスター、ジミー・クリフをツアーに招き、今度は主要都市のサッカー・スタジアムで大がかりなジョイント・コンサートを行った。かくしてジルの歌った「ノー・ウーマン、ノー・クライ」はブラジルのヒット・チャートNo.1を飾り、70万枚のセールスを記録した。

1981年、アルバム『ルアル（月の光）』を発表、数多くのヒット曲を生んだ。'82年、再びモントルー・ジャズ・フェスティバルに参加し、このときは『レゲエ・ナイト』でジルは登場。続いてのヨーロッパ・ツアーも含め、ジルは完全に成功の波に乗った。'82年アルバム『ウン・バンダ・ウン』を発表。このときからジルのバックを支えるバンドは「バンダ・ウン」と名付けられた。'83年初め、ジルはUSAおよび中米ツアーを開始。その柔軟でエネルギーに溢れたステージは、すべての聴衆の心をとらえた。次いで同年、アルバム『エクストラ』でさまざまなサウンドの混合を試み、'84年にレゲエ・ミュージックとファンク・ロックの混合体ともいえるLP『人類（ラサ・ウマーナ）』を世に送り出す。このアルバムではジャ

ブラック・ルーツへの 目醒め

1972年2月、ジルは自らの音楽のルーツを求めてブラジルへ戻ることになる。その当時つくられたアルバム『エスプレッソ2222』には「バイーアへの帰還」といった故郷回帰の歌、さらに彼の東洋へのあこがれの気持がこめられた「オリエント」などが歌われている。帰国後、トロピカリズモの仲間達は再び集まってコンサートを聞きはじめていた。

'75年、ジルは彼にとって記念碑となる成功作を発表する。『レファゼンダ』と題されたそのアルバムで、ジルは彼自身の原点に立ち戻り、豊かな大地への賛歌をうたいあげる。そして、「モロ（リオのスラム街）と北東部の貧しい人々の音楽の中から自然の力を引き出す

というテーマを掲げ、熱い音楽創造を開始していった。さらにその壮大なメッセージは発展し、世界のアフリカンへの呼びかけにつながってゆく。

'76年、ジル、カエターノ・ヴェローゾ、ガル・コスタ、マリア・ベターニアの4人はエキセントリックなショー「やさしき野蛮人達」で全ブラジルをツアーする。

'77年にナイジェリアで開催された黒人芸術国際フェスティバルにブラジルを代表して参加したジルは、いよいよブラック・ルーツ回帰のコンセプトを高めていった。同年発表した彼の代表作『レファヴェーラ』は、この高らかなるメッセージの収獲で、アルバムばかりか、コンサートでも圧倒的評価を得た。

そして同年11月、ジルはWEAレコードと契約を結び、彼のまさにインターナショナルな活動が爆をきったように開始される。



今年1月、バイーア賞金勲章授賞式。左がカエターノ、右がサルヴァドル市長。

マイカのグループ「ウエイラーズ」とも共演。
この年もヨーロッパ各地で好評のツアー。

'85年1月、ブラジルで世界的なスケールの
ロック・イベントが行われ、若者達の心を
すっかりとらえてしまった。この「ロック・
イン・リオ」のフェスティバルで海外のロッ
ク・アーティストに混じって色彩豊かな自国
の素晴らしいサウンドを確固として主張した
のがジルだった。ジルのインターナショナル
であり個性的なメッセージは、ブラジルの若
者達をある意味で目覚めさせたといえる。そ
して最新の傑作アルバム「ふたつの月」を発
表。内陸の理想郷を探し求めて旅するという
ブラジルのテーマと、今日の人種問題にたい
するユニークなメッセージをはらんだ力強い
内容のアルバムで、批評家達から絶賛を浴び
ているもの。音楽的にはアフリカのジュジュ・
ミュージックからレゲエ、さらにブラジルの
あらゆるリズムをカラフルに織り混ぜたダイ
ナミックな仕上がりに。

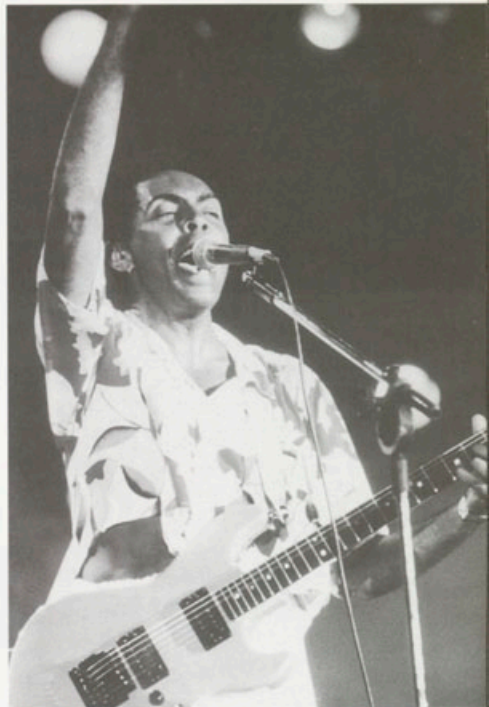
1985年、ジルベルト・ジルは芸歴20周年を
迎えた。昨年末、この偉大なジルの記念イ
ベントがサンパウロのあちこちで始まった。
討論会から展覧会、写真展から映画祭、さら
にコンサートにパフォーマンス、この他、ア
ニエンビ公園で開かれた記念コンサートには、
MPBのすべてのトップ・アーティストが集合
して20周年を祝った。ひとりのアーティスト
のというよりは、市の重要行事といった風情
である。出身地サルヴァドールではこの1月、
彼の功績に対して市の名誉ある賞が授けられ、
大がかりな野外コンサートは熱狂的な市民に
よって大成功をおさめた。そして、その後の
メキシコ、イスラエル公演、ヨーロッパ・ツ
アとなるのだが、前述のとおり成功ぶり
である。そしていよいよ日本公演だ。

よく考えてごらん、若者よ
船倉を洗いながら長距離貨物船で
日本へ行く可能性を。



太陽の沈むところを見たいという
好奇心にかられて。
見るのです、理解できるのかどうか
つまり、すべては決心しただいという
簡単な理由によって。
決心するのです、若者よ。

ジルが70年代初頭に発表した「オリエント」
という曲である。長年、東洋思想を追求し日
本に憧れてきたジルの、まさに待望の公演と
なる。今までになくスケールの大きなMPB(ブ
ラジル・ポピュラー音楽)シーンのスーパ
スターの登場!!!アフロ・ブラジルを代表して、
限りなく豊かなサウンドを歌いあげてくれる
に違いない。



「やさしき野蠻人達」左からジル、ベターニア、カエターノ、ガル。

ジルの魅力

渡辺貞夫が語る

今年の4月23日から、6年ぶりにブラジルを訪れたわけだけど、ジルベルト・ジルたちが生まれ育ったバイアのサルヴァドールに1週間、リオデジャネイロに1週間というスケジュールだったんだ。サルヴァドール、あの街はね、やはりアメリカのサンフランシスコっていう気分で、どっかかっていうとアフリカっぽいチョコレート色の人が80%なんだね。前に「バグンサ」っていうビデオ作るんで、'80年に、サルヴァドールに行ったんだけどそのとき、たまらなく良かったからもう一度来たかったわけ。テレビ番組「音楽の旅はるか」で、ぜひご紹介したいと思ってた。

ここからはドリヴァル・カシミとかジル、カエターノ・ヴェローゾ、マリア・ベターニア、ガル・コスタ、ジョアン・ジルベルトとか、とにかくいっぱい有名なアーティストがててんの。あの街のカーニバルのチームで「ガンジーの息子たち」っていうのがあるんだけど、それなんかはジルベルト・ジルがコーチしてるんだとか聞かぬ。オールド・タウンがあって、すごく風情があるいい街並みしてる。ニートな街って言ったらいいのかな、それでいてファンキーでさ。これがカーニバルの時期になるとみんな踊っちゃう。リオと違ってカーニバルの列に入れないってことがないわけだ。ワイワイ、押しくらマンジュウみたいなもんだね。またリオと違った興奮がある。大好きな街だね。

僕がいちばん最初にブラジル音楽の良さを知ったのはジョビンのボサ・ノヴァだったけれど、それからジルやシコ・ブアルキ、トッキーニョ、カエターノ・ヴェローゾ……と聴いてきて、いつも思うのはブラジルは「メロディーの宝庫」で、ほんとうにいいミュージシャンがいっぱいいるってことだね。だから、アフリカに行ったときには、もうそこに居るだけでいいなって気分なんだけど、ブラジルでは駆けずり回りなくなっちゃうんだ。それに予想してたよりもリズムがゆったりしていた。日本で演奏するときは、やれ走ったの遅れたのって、すごくリズムにナーバスになっちゃうんだけど、とにかくゆったりしてるよな。

リズムに余裕がある。ビートのひとつひとつがしっかりしてるから、妙に意識していないんだね。

ジルに会えたのはリオでね、ちょうど今回着いた日にジルがバンドのコンサートをやったんだ。それを聴きたいなと思ったけど、すぐ次の日にサルヴァドールに飛んだから。ところが、またリオに戻ってきたら、彼がソロ・コンサートをやってたね。それはシリーズ「ソロの光」ってコンサートで、コパカバナ・パレスのゴールデン・ルームというところでやってたんだけど、たったひとりギター弾きながらやるんだ。トッキーニョもカエターノも既にやったらしいんだけど、一緒に行ったトッキーニョいわく「ソロがいちばんそのアーティストの真髄が出るからいいんだ」ってことらしいんだ。それで前日のリハーサルにテレビ取材で出かけてった。ジルはステージにポツンといるわけだ。それまでジルとは面識はなかったんだけど、リハーサルが終わってから話しかけてきてくれて、とっても喜んでくれてね。番組ではちょっとしか紹介しなかったけど、えんえんギター弾いてくれたんだよね。こっちも床なんか叩いてやって……。

「オリエント」って、彼のレコードに入ってる曲なんだけど、とにかくオリエントにあこがれてて、日本に来るのを夢のように毎年期待してたのが今年やっと実現したんだね。いちばん新しいレコードには「旅」って文字がちゃんと入ってる。

もともと、あのサルヴァドール出身だし、間接的にはアメリカのドン・グルーシンやラルフ・マクドナルドからジルのことは聞いてた。ロサンゼルスで一緒にレコーディングしてるからね、彼らとは。「サラ、サラ……」っていう曲とか、噂ではジルは変わった人だとか、ナーバスな人だとか話に聞いてただけど、ゼンゼン！ もうすごいスイートな人だったね。いちばん印象的だったのは、実は彼の「ホーダ・ヴィーヴァ」って曲があるんだけど、それが僕すごく好きで昔、バンドでよく演奏したって伝えたら、とっても喜んでね。

ジルは昔はサンバ、ほんとにサンバって曲

を作ってた人だけど、今はレゲエとかロックでも曲作って、リズム的にはかなりインターナショナルになってきてる。僕が'68年に初めてブラジルでかけたときに、ジルの曲もいくつか好きになったんだけど、この当時いちばん精力的にヒット曲をかいたのがシコ・ブアルキだった。そしてジルやカエターノ。この時期の歌は誰の聴いても気分が似てたね。そんな意味では今はそれぞれの作曲家が自分の個性をもっと出してきてるような感じがする。その人の個性的なメロディーっていうのをそれぞれ持っているからね。彼らは個性を売らないで質のいい音楽作ってると思う。

で、テレビ取材した次の日、そのソロ・コンサート聴いたわけ。そしたらすごく暖かいコンサートでよかった。羨ましかったのは、どの曲もどの曲も、ジルが歌うたびにホール全員が歌うわけ。ギターいっちょで、聴衆と一緒に。みんな曲を知ってるんだよ。ブラジルの曲って「詩」と一体化してるからみんな歌うんだね。聴衆が同じ気分で、力が入らなくて、楽しそうに歌ってるって感じなんだ。合い間にジルがおしゃべりするんだけど、だいたい僕はアーティストが曲間にしゃべるってのは好きじゃないんだけど、彼のはすごくいい雰囲気だったね。良かった。

そしてステージの最後にジルが、僕と、一緒に行ってたトッキーニョを紹介してくれてトッキーニョは3曲歌った。その時、ジルは横にしゃがんで、こう見上げながら聴いてるわけ。それが客席のこっちから見てるとまたよくってねえ。こっちはサクソフォン持てなかったから、ステージに上がらなかつたけど、持ってって一緒に何かできればよかったねえ、って後でみんな言ってた。

コンサート終わった後、ジルたちやトッキーニョとレストランに集まった。10時ごろから2時間あまりのコンサートだったから、終わったのは午前1時になってたね。みんなと一緒に飲んで、食事して……日本での再会を約束して帰ってきたんだ。

ブラジル音楽ってやっぱり本当に国民性というか、音楽を心から楽しむところから始まっているわけで、ある意味ではすごくピュアなわけだね。ジョビンもトッキーニョもそうだけど、とにかく作曲家としての彼らにあこがれて仕事してきたから、彼らから受けた恩恵ははかりしれないわけ。だから、そういう人たちがやると日本に来て、こうやってコンサートできるってのはすごく嬉しいんだ。

(池上比沙之・編)

